

桐原家の人々1

恋愛遺伝学講座

茅田砂胡

中央公論新社



目次の操作方法について

・表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わります。ここでクリックすると、該当の頁までジャンプさせることができます。

D T P	カ バ ー デ ザ イ ン	口 絵	挿 画	カ バ ー イ ラ ス ト
ハ ン ズ ・ ミ ケ	し い ば み つ お (伸 童 舎)		成 瀬 か お り	

目 次

1		7
2		14
3		21
4		41
5		51
6		64
7		75
8		86
9		123
10		138
11		168
12		177
13		205
あとがき		210



桐原家の 人々

1

恋愛遺伝学講座

災難は、思いもかけない時にやってくる。

桐原眞己にとつて、それはまさに実感だった。

「俺、おまえが好きみたいだ」

思いつめたような台詞に、聴いた眞己はあやうく
ひっくり返るところだった。

「み、みや……？」

青天の霹靂とはまさにこのことである。

自分の部屋でいつものように他愛ない会話の最中、
妙に黙りがちになっていた相手が、いきなりそんな
ことを切り出してきたのだから、驚くと言うほう
が無理だった。

無論、この場合の好きという意味には、特殊性が
ある。『おまえ、いい奴だなあ』とか『俺たち、親
友だよな』とかいうのとは、大きく様相を異にする。
とても信じられなかった。

何かの間違いか冗談だと思った。

しかし、その顔は大まじめなのである。

「とうとう言っちゃまった。俺もおまえも男だから、
そりゃあ世間一般常識には反することだろうけど、
自分の気持ちに嘘をつくよりいいよな」

「みや！ ちょっと待て！ 男同士とかじゃなくて、
それ以前の問題だぞ！」

「どんな？」

「ど、どんなって……」

こういう時に効果的な言葉が出てこないのが、我ながら嘆かわしい。

眞己は小さい時からきまじめな直情径行型の性格だった。特に、冗談たっぷりの物言いいは今ひとつついていけないところがある。

今もそうだった。物心ついた時から知っている相手が、見たこともないような思いつめた顔をして、ゆつくりと近寄ってくるのに、眞己ときたら蛇へびに睨にらまれた蛙かえるか何かのように固まってしまつて身動きもできない。

「あ……んまり、たちのよくない冗談だぜ、みや」
やつと言葉を絞り出したが、それでも相手はびくともしない。

「冗談でこんなこと言えるかよ」

そう言いながら何と何と、着ていたシャツのボタンに指をやって……実にゆつくりとした作爲的な動きだった……はずしはじめてしまった！

眞己の全身からは、どっと汗が吹き出した。

「冗談でないならなお悪い！ おつ……俺たちは兄弟なんだぞ!!」

そうなのである。

数えて今年で十六年、ずっと同じ屋根の下で暮らしてきた相手だ。

もちろん裸はだかなんか嫌というほど見ている。一緒に風呂呂に入ったことだつて数え切れない。同じ布団ふとんで眠ったことだつてある。

しかし、この状況下ではやはり冷や汗をかかざるを得ないのだ。

性格も、好みも、誰より詳しく知っているはずのこの兄弟が、どうしてこんな突拍子もないことを言い出したのか、眞己の頭はそれだけで限界だった。

事態の異常性を考えている暇もなかった。何とかこの状況から逃げ出す術だけを必死で考えていた。

「やつぱり……やつぱりそれはまずいぞ。ホ……ホモだけならまだしも、男同士で近親相姦そうかんなんていうものは、ものすごくまずいと思うぞ。世間だつて、

うちの家族だつて納得しないぞ」

何かもつと根本的なところで重大な問題があるような気がするのだが、そんな言い訳しか出てこないところが情けない。

そして、家族という言葉が口をついて出た途端、同い年の姉妹のことが頭をよぎっていた。

「だいたい……こんなの猛^{たけ}が聞いたらなんて言うと思つてゐるんだ。兄弟にホモがいるなんて、あいつ、頭から湯気立てて怒るぞ。俺もおまえもただじゃすまなくなるぞ」

女ながら猛の毒舌なことは、間違つても敵に回したくないと眞己が固く思い込むまでに至つてゐる。

こんなことが明るみに出たら、変態の烙印^{らくいん}を押されることは間違いなしだ。

しかし、同じ顔の姉妹の名を聞いても都^{みやこ}は引かなかった。あつさり言つた。

「違うだろ」

「みや?」

「俺たち、兄弟なんかじゃないだろ?」

言い返せなかった。

全身が、ひやりと冷たくなつた。

眞己と、都と、もう一人、猛は、同じ日に生まれ、た三つ子ということになっている。

当たり前だが、歳も同じなら誕生日も同じだ。

三人揃つて四月二十一日生まれである。

そして顔も同じだった。

少なくとも都と猛はそうだった。この兄と妹、もしくは姉と弟は、今でも見分けに困るくらいそっくりなのである。

二人とも色素が薄く、顔立ちは小づくりで、体つきもすんなりとしなやかである。小さい頃は対の人のように可愛らしかったので、彼等に初めて会う人はみんながみんな、判で押したように、

「あらまあ、こちら双子さん? かわいいわねえ。男の子かな。女の子かな?」

と、猛と都に対しては感心して、太鼓判^{たいこばん}を押して

くれた。

また、両親ともに色白の優しい面立ちだったから、「お父さん、お母さんに、よく似てるわねえ」

という褒め言葉（？）も、決まり文句だった。

しかし、眞己だけはその二人の横にいても、三つ子はおろか兄弟に見られたためしがない。

単に顔がちが違うばかりではない。色白の、おとがいの細い美人顔の二人に比べて（名前と顔はともかく、中身はれっきとした男の都はそう見られることを激しく嫌がったが、事実は事実だ）眞己は一人だけ、かつきりと線を描く骨太の顔の輪郭だったし、髪も一人だけ真つ黒に強かった。眉も太く、肌質も浅黒く、体つきも他の二人はもちろん、同じ年齢の男子に比べてもぬきんでて大きく、しっかりとしていた。

ここまでくると単に似ていないではすまされない。明らかに系統が違うのである。

となると、大抵言われる文句は、

「こちらはお友達？」

である。

あるいはどんなに悪くても、

「こちらはお兄ちゃんかな？」

である。

その度に子ども心に不安を覚えた。両親は、眞己はおじいちゃんに似たんだと笑っていたが、不安は拭えなかった。

写真で見える祖父は、当たり前だが老人で、自分と似ているとは思えなかったし、他の家族の誰とも自分とは共通点はない。

都は、まっすぐ眞己を見据えてなおも言った。

「おまえは俺の兄弟なんかじゃないんだよ。まるで似てないし、血液型だって違うじゃないか」

また、体が冷たくなった。

「親父はA型、母さんはB型。そりゃあ、AとBからでもO型は生まれるかもしれないけど、家の中でおまえ一人だけだぜ。麻亜子さんはB、零ちゃんはA

B、ばあちゃんはB、死んだじいちゃんはA B。親父のほうの両親は両方Aだけど……俺と猛もA B。やっぱり変だぜ」

「みや……」

「おまえだつてわかつてたんだろ？」

こんな場合だというのに、眞己は泣きたくなつた。もしかしたらそうなのかもしれないと、ずっと昔から疑つていたことだつた。それどころか、たぶん本当なのだろうと、今ではほとんど確信していたことでもあつた。

それでも、ずっと一緒に暮らしてきたこの相手に言われたくはなかつたのである。

「何でおまえがそんなことを言うんだよ……」

「問題をはつきりさせときたいからさ。おまえは父さんにも母さんにも全然似てない。異母兄弟や父親違いの兄弟っていう可能性もない。だいたい、あの人たち、見ていて嫌になるくらい夫婦仲は円満だしな。わかるだろ」

「……………」

「いいか。眞己。戸籍がどうあれ、俺たちは赤の他人なんだ。だつたら氣にすることなんかないじゃないか。おまえのいう男同士の問題に関しては……まあ、これはさすがに俺もまずいかと思うけど、そういうのも珍しくなくなつてゐるご時世だ。特に俺とおまえの場合、同じ屋根の下で毎日顔を合せてゐるわけだし、同じ部屋で寝ることだつてあるわけだ。こりゃあ、かなりしんどいぜ。俺もそう我慢の利くほうじゃあない。だからつて惚れた相手の寝込みを襲うような卑怯な真似はしたくない。だつたら正直に打ち明けるしかないもんな」

いかにも都らしい、豪快で大胆な物言いである。

またまずい事に妙に説得力があるような氣がする。言うことを言つてしまった都は、極上の笑顔で、につこり笑つた。

「ということ。いいよな」

「ちよつと、ちよつと待て！」

壁に追いつめられた眞己は大慌てで逃げようとした。

何がいいんだ。何が！

「みや！ 待てつたら！ 勝手に決めるな！ 俺の気持ちはどうなるんだ!？」

「おまえだって、俺を好きだろう?」

舌の根に杭を打たれた気がした。

そんなことはない、と言い切れないところが情けなかった。

情けないどころの騒ぎではない。優柔不断もここまで来ると許せる範囲を大きく超えて大問題だ。たとえ血はつながってなくなつて俺たちは同じ日に生まれた兄弟なのだと、猛と三人でずっと兄弟のままдейようと、胸を張ってそう言い切らなければならぬ場面だというのに、事実そう思っているはずなのに、どういうわけか……。

言えなかつたのである。

さらに眞己は思ったことがそのまま顔に出ると来

ている。

都は綺麗に微笑んだ。

男にしておくのは惜しいような、色の白い整った造りの顔だ。時折、密かに見とれてしまったこともないではなかつた。

「だから、いいよな……?」

甘い声だつた。

頭の芯をくらりとさせるようなものがあつた。

しかしそれでも、理性と常識と分別を限りなく愛する眞己は、必死でこの誘惑と闘い、踏みとどまろうとした。こんなところで流されるわけにはいかなかった。

しかし、都ときたら、色っぽいとしか言いようがない目で迫ってくる。

眞己は身動きもできない。

細い、長い指が自分の顎に触れようとする。

激しい動悸のせいで呼吸がままならない。

形のいい唇がゆつくりとよせられてくる。

目をそらすことも瞬きすることもできない。

まさに絶体絶命の状況で眞己は破れかぶれに大声を張り上げた。

「わ———っ!!」

絶叫したところで跳ね起きた。

一瞬、自分がどこにいるかわからなかった。

酸素を求めて必死に呼吸しているうちに、目の焦点が合ってくる。

気づけばそこは見慣れた自分の部屋だった。

袖を通した寝巻が、びっしりと冷や汗に濡れている。

夕べ、自分で敷いた布団の上で、激しい動悸にほとんど震えながら、思わずあたりの風景に目をやった。

カーテンを通して、窓から明るい日が差し込んでいる。

窓の外からは鳥の声と、朝の挨拶を交わす近所の人たちの声がある。

いつもとなんら変わらない、一日の始まりの情景だった。

「あっ……」

ただ一人、快適な目覚めとは程遠い朝を迎えた桐原眞己は、まだ震えている手で冷や汗に濡れた額を押さえ、大きな安堵の息を吐きながら、自己嫌悪に低く呻いたのである。

「悪夢だ……」

2

「眞己！ なにやってんだ、遅刻するぞ！」

「わあっ!!」

威勢のいい声と、がらりと開け放たれた襖ふすまの音に、眞己は思わず悲鳴を上げて飛びのいていた。眞己にしてみれば無理もない反応だったが、あまりの奇声に相手も怯ひるむ格好になった。

「なんだあ、おい……？」

現れたのは今まで夢の中で眞己に迫っていた当の本人、都である。

もちろんそんなことは本人は知る由よしもないので、眞己の様子に目を丸くしている。

都はどこにいても人目を引いた。今ではさすがに誰も（学生服を着ていれば）女の子とは間違えない

し、取り立てて美形というほど派手なつくりでもないのだが、それでもつい目が追うのだ。持っている雰囲気や身のこなし、そうしたちよつとしたものに引きつけられる。面と向かつて言えば猛烈に怒るだろうが、きれいというのが一番びつたり来る。

今時の高校一年にしては、都はそう大きなほうではない。やつと百六十五くらいである。眞己が既に百七十五を越えているので、並ぶとよけい差が目立つ。

着るものの融通ゆうずうがきかなくて困ると母親は笑っているが、都にはおもしろくないらしい。

高校の制服が出来上がって来た時、まるで寸法が違うので、同じものを食べてるのに何だっておまえ

だけそう大きくなりやがったんだと、呆れたように文句を言ったくらいだ。

その都は、自分がもう制服を着込んでいるのに、眞己がまだ布団の中なので不審に思ったらしい。

ちよつと心配そうな顔になって近寄つて来た。

「何だよ、おまえ、熱でもあるのか?」

「ない、ない! なんでもない!!」

ぶんぶん首を振り、眞己は更に後ずさつた。

とてもまともに都の顔が見られなかった。

布団を抱えて大きな体を丸くしている兄弟に、都

はますます訝^{いぶか}しげな目を向けて、

「いいけどよ。時計見てから丸くなつたらどうだ?

休むつもりじゃないんならさ」

「えっ」

慌てて時計を確かめ、眞己は再び悲鳴を上げた。

「わあっ!」

一瞬で跳ね起きて、制服をひつつかむ。とても布団を上げている暇はない。

「何で起こしてくれなかったんだよ!」

「ガキじゃあるまいし。いいかげん兄ちゃんの手を煩^{わづら}わせるのはよしてくれよな」

「誰が兄ちゃんだ! 俺のほうが兄貴かもしれないじゃないか!」

「それこそ冗談きついで。いまさら誰が呼べるかよ。早く来ないと置いてくぞ」

笑いながら軽い足音を立てて階段を下りていった。いつもの都だった。くそ生意気で、皮肉屋で、容姿と裏腹に可愛げのかけらもない。

眞己が大きく安堵の息を吐いたのは言うまでもない。

同時に自分に対する嫌悪がどつと襲つてくる。

一体全体さっきのアレはなんだつたんだ。

夢を見るに事欠いて、何だってあんな、ものすごい、とんでもない悪夢を見なければならぬんだ。

夢は本人の願望の現れと何かで読んだような気がするが、いいや、冗談じゃない。

そんな馬鹿なことがあつてたまるか。

ボタンを止める指が震えた。

また呼吸がおかしくなりそうだった。同時に、激しい羞恥に全身が熱くなる。

階下から声が飛んで来た。

「眞己！　なにやつてんだ。本当に置いてくぞ！」

「今行く！」

靴をつかんで階段を駆けおりと、大急ぎで顔を洗った。そのまま家を飛び出そうとしたのだが、邪魔が入った。

「おや、おはよう。今日は遅いねえ」

妙にのんびりと言ったのは母親の豊である。

「遅いねじゃないよ！　起こしてくれればいいのに！」

「高校生にもなつて母親を当てるんじゃないよ。

御飯できてるからね」

「食べてる暇なんかないってば！」

「お待ち」

豊はそのまま家を飛び出そうとした眞己の襟首を引つ摑んだ。突進しようとする高校生の息子をそれだけで釘付けにするのだ。たいへんな馬鹿力と言うべきか、それとも長年のこつと言うべきか……侮れない。

「母の愛情を無駄にする気かい。御飯一膳だけでも食べていきな」

「遅刻するんだってば！」

「それがどうした。人間、体が資本なんだよ」
たくましい母である。

人間は健康であれば何とかなる。従つて食事さえきちんと取つていれば大抵のことは何とかなる。というのが持論でもある。

おかげで眞己たちは小学校の頃から遅刻しようが何だろが、朝食抜きで家を出られた試しがない。

「ほらほら、ちんたらしてんじゃないよ。遅刻しそ
うだつてんならなおさらだ。さつさと一膳かつこん
でいきな」

これがでつぷり太ったおばさんに言われるならともかく、すらりと優しそうな中年婦人の口から飛び出してくる台詞なのだから、奇異な眺めだ。

桐原家の人たちの見た目と性格が一致しないのは、絶対にこの母の遺伝だと眞己は思う。

豊はもう五十を越えているから、そう若い母親ではない。しかし、一見したところは四十の半ばかりに見える。体つきも若々しい。黙って座つてさえいれば、まだまだ馥郁^{ふいく}たる上品そうな美人だというのに、中身は鉄火^{てっか}な下町のおかみさんだ。

これをそっくり受け継いだのが長女の麻亜子^{まあこ}だ。もう三十をいくつか越えているはずだが、やはり若く見える。ついでに気も若い。これまた黙つてさえいれば文句なしの美人だ。

そのせいか、

「あたしは（今でも）二十七歳なのよっ！」

言い張つてきかない。

その年になるまで結婚しないでいるのは仕事の邪

魔になるからだそうで、単に彼氏ができないせいだろうと言おうものなら、こちらは容赦^{ようしゃ}のない鉄拳^{てっけん}が飛んでくる。

現在、麻亜子は都心に一人住まいをしているので、めったに家に帰つてこない。

長男の零^{れい}も設計関係の仕事だとかで、日本中はおろか、海外にまで頻繁^{ひんぱん}に脚を運んでいて、これまためったに家には帰つてこない。

猛がよく言う。

「あたしたち、本当は五人兄弟なんだけど、どうも三人兄弟だとは思えないわね」

「同感」

と、眞己と都が頷^{うなず}くくらい、彼等は年長の兄弟に対してなじみが薄い。

十年以上も歳が離れていると、しかも日頃別々に住んでいると、どうしても兄弟という自覚^{わかく}が湧かないのは仕方がない。

そもそも眞己たち三人は、麻亜子や零が学生服を

着ているところさえ見たことがない。正確には覚えていない。物心ついた時には二人とも独り暮らしを始めて家にはいなかったから、子どもの頃の三人にとつて麻亜子と零は、時々家にやってくる知らないお兄さんお姉さんのような存在だった。

さらには父親も出張の多い生活で、一年の半分くらいを海外で過ごしているから、普段この家にいるのは母の豊、祖母の締、そして眞己、都、猛の五人という事になる。

おかげで気分は母子家庭の三人兄弟だ。

時々、ちゃんと父親がいることも長男長女がいることも忘れそうになってしまう。母親の豊がおよそ湿っぽくない豪快なおかみさんタイプだからなおさらだ。父親のいない寂しさなど感じている暇もない。さて、時間は差し迫っている。遅刻寸前である。しかし、ここで『母の愛情』を無駄にして朝食抜きで出かけようものなら後が怖い。

眞己はどうにも致し方なく、お膳に飛びつき、大

急ぎでご飯をよそった。時計を睨みつつ、猛烈な勢いで朝食をかつこみ始める。

「何だ、眞己。まだいたのか？」

眠そうに声をかけてきたのは長男の零だった。昨日から珍しく自宅に戻っている。

自分と家族の中に共通点があるとすれば、この人の身長だけだろうと眞己は思っている。父親も母親もそう大きなほうではないが、二十八になる零は鴨居につつかえそうな長身なのだ。

ただし、顔だちには似かよっているところはない。

零もまた、都や猛と同じ系統の、色の白い端正な顔だちだった。収入もあるし、性格もいい。これで彼女がいらないわけではないだろうと思うのだが、この人も気ままな独身を楽しんでいるらしく、眞己達は今まで一度も、この人が特定の女性の話をするのを聞いたことがない。

「こんな時間までいいのか。都はとつくに飛び出していったぞ」



俺も飛び出したい。

その嘆きは口一杯に頬ばった食べ物のせいで言葉にはならなかったが、意味は伝わったようである。

零はおもしろそうに笑った。

「豊さんは厳しいからな。俺も昔はよく遅刻させられた」

零はどういうわけか両親のことを名前で呼ぶ。

『豊さん』『広美さん』だ。

豊に言わせると、

「あんたみたいな大きな男におふくろさんなんて呼ばれると、どうも老け込んでいけない」

ということらしいが、おかげで下手をすると有閑マダムとそのつばめである。

もつとも零は見た目に大変なハンサムなので、豊も悪い気はしないらしい。

ああ、そんなことを考えている場合じゃなかった。「いってきます！」

ほとんど箸を投げ捨てるようにして、眞己は家を

飛び出した。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。